

聖書：マタイ 6：10b

説教題：みこころが地でも

日時：2018年7月22日（朝拝）

今日は主の祈りの第3の祈り、「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」という祈りについて見て行きます。すでに「御名が聖なるものとされますように」という第一の祈りと、「御国が来ますように」という第二の祈りについて見ましたが、これら三つの祈りは互いに密接に関連するほとんど一つの祈りとも考えることも可能かと思えます。御名が聖とされること（御名があがめられること）は御国が来ること（神のご支配が拡大すること）であり、また御国が来るとはみこころが地でも行われることと同じだからです。それなら3回に分けず1回でまとめて話す方がいいという考えもあるかもしれません。しかしカルヴァンは「多くの言葉で口やかましく押し付けられることは意味あることである」と言っています。内容はほとんど同一と言えども、私たちの鈍さのゆえにくどいほどに繰り返し違った表現で教えられる必要がある。そういう意味ではやはり1回でさっと通り過ぎず、3回に分けて繰り返し見て行く方が目的にかなっていると言えるかもしれません。

さてまず注目すべきは「みこころ」と訳されている言葉は、原文を直訳すれば「あなたの心」「あなたのご意志」であるということです。ここに重大なメッセージが語られています。すなわち祈りとは神の御心を求めることであるということです。多くの人は祈りをどう考えているのでしょうか。祈りとは私の願いを聞いて頂くこと、私の願いを神に知ってもらい、私の願いを神に実現していただくこと。そう考えているかもしれません。しかしイエス様いわく、祈りとは神の御心になることを求めるものである。これはさっそく私たちにとってチャレンジとなる真理ではないでしょうか。神のみこころと私の願いが一緒の時は問題ありません。問題は神のみこころと私の願いが一緒でない場合。なぜそういうことがあるのでしょうか。一つには神は無限・永遠・不変の全能者であるのに対し、私たちは一介の被造物、有限な存在にしか過ぎないからということがあります。私たち有限な者たちには無限なる神の御心について理解また把握できないことがたくさんあります。ゆえに神の御心にピッタリ一致したことを祈ることができない。しかしそれ以上に根本的な問題は私たちに罪があるからです。罪のために私たちは物事を歪んで見えています。特に私たちは世界を自分中心に見て、自分が主権者となり、自分が思う通りにしたいという傾向を持っています。そのために神の御心と大いにずれてしまっ

ている。いや丸っきり反対のことを考えている。しかし言うまでもなく、ちっぽけであらゆるところに歪みがある私たちが考える良いことよりも、聖なる神が良しとされる御心の方がはるかに良いことです。そのことを覚えて、私の願いではなく、あなたの御心になるように！と祈るべきことがここに教えられています。

さてそうだとすると、私たちは神の御心に対する関心へと導かれます。果たして私たちはどうやって神の御心を知ることができるのでしょうか。あるいは神のみこころを知ることが私たちに可能なのでしょうか。聖書を見ると、御心には二つの側面のあることが分かります。このことをわきまえずに混同してしまうところから様々な誤りが生じます。この二つの側面について言われている御言葉として申命記 29 章 29 節があります。「隠されていることは、私たちの神、主のものである。しかし現されたことは永遠に私たちと私たちの子孫のものであり、それは私たちがこのみおしえのすべてのことばを行うためである。」

ここに神のみこころには「隠されているみこころ」と「現わされたみこころ」とがあるということが語られています。どちらも主のみこころであり、主においては一つのことです。しかし私たちの側からすると二つのカテゴリーに分けられる。まず「現わされたみこころ」とは、神が啓示によってお与えになった言葉、ここで言えばモーセが取り次いだ神の律法、またそれを今日的に言えば聖書の御言葉のことです。神は確かに聖書のうちに、ご自身のみこころについて明らかに現わしておられます。ではもう一つの「隠されているみこころ」とは何でしょうか。それは私たちに示されていないみこころ、事が起きるまで神の内に秘められている御心、事が起きて初めて私たちにそれと分かるみこころのことです。言い換えれば神の摂理的導きによって明らかにされる御心のことです。そして大事なことは、この二つのみこころの内、私たちの義務は現わされたみこころに従うことであるということです。今、開いている申命記 29 章 29 節に、現わされた御心について、それは永遠に私たちと私たちの子孫のものであり、私たちがそれを行うためとあります。一方で「隠されている御心」は主のものであると言われていています。つまり私たちはそちらの神の領域に立ち行って、あれこれ論じるようなことをしてはならない。それはあなたがたの領分ではないと言われていています。この区別がなされないために人々は御心について勝手なことを言い始めます。すなわち多くの場合、人々はこの禁じられている領域である隠されたみこころを覗き込むようなことをして、ここに神の御心があるかも知れないからと言って自分勝手なことをするのです。そしてそのように度

を越えた好奇心に走る人はたいいてい、すでにはっきり現わされているみこころ、すなわち聖書を軽んじ、これを蔑ろにするという誤りも同時に犯しやすいのです。

聖書の実例を見ると、もう少し具体的に考えることができます。たとえば創世記に出て来るヨセフ。皆さんに質問します。ヨセフが兄弟たちによってエジプトへ売り飛ばされて行ったことは主のみこころでしょうか。答えはイエス。ヨセフは後に兄弟たちに「私は弟のヨセフです」と言った時、こう言いました。「神はあなたがたより先に私を遣わし、いのちを救うようにしてくださいました。・・・私をここに遣わしたのは、あなたがたではなく、神なのです。」これはもちろん神の隠されていた御心のことです。事が起こるまでは誰にも分からなかった奇しみこころです。では兄弟たちのしたことは、その神のみこころと一致していたのだから、良いことをしたのだと言われるべきでしょうか。もちろんそうではありません。時々、結果的に良いことにつながったから、それも良かったのではないかと言う人がいますが、聖書は決して結果オーライの考え方をしません。なぜなら私たちの義務は現わされたみこころ、すなわち啓示されたみこころに従うことだからです。聖書に命じられていることは兄弟を愛することであり、隣人を自分と同じように愛することです。ですからヨセフの兄弟たちは当然責められなければなりません。彼らのしたことは現わされた御心に反していたのです。

またダビデがサウルに追われてほら穴にいた時、サウルが用を足すために一人で同じほら穴に入って来たあの出来事についてはどうでしょうか。あの時、ダビデの部下たちは、ダビデに進言して、「これは主があなたの良いようにせよ！とサウルを渡してくださいましたその時です！今ここでサウルを殺すことは神の御心です！」と言いました。こんな状況は他に考えられないから、これは神がお与えくださったチャンスに他ならない！と。しかしダビデはそうでないと思いました。油注がれた人に手を下すことは神に逆らう行為である、と。ダビデは先の二つの御心の内、どちらに従ったのでしょうか。それは現わされた御心です。聖書に啓示された御心です。一方の部下たちは、それを無視して、主に属することである「隠されている領域」に勝手に足を踏み入れて、これは神の御心に違いない！と言って、自分たちのしたいことを正当化しようとした。このような意味で「これは主の御心ではないか！」「こうすることも主の御心ではないか！」などと私たちもやっていることはないでしょうか。

そして決定版としてイエス様の十字架をあげることができます。イエス様が律法学者

たちによって十字架に付けられ、殺されたことは神のみこころでしょうか。神の内に秘められていた御心としてはイエスです。神はこれによって私たち罪人の贖いをなし遂げてくださいました。では律法学者たちはそのみこころと一致することをしたのだから責め過ぎてはならない、むしろ良い働きをしたと言うべきでしょうか。とんでもないことです！私たちの義務は先程来述べていますように、現わされた啓示的御心に従うことです。聖書ははっきり、殺してはならない、憎んではならない、自分のしてもらいとおりに他の人にもしなさいと言っていますから、その基準に照らして彼らのしたことは判断され、責められるのです。ただ驚くべきは、そのような人間の悪さえも用いて良いものを取り出された神のみわざです。律法学者たちは自分たちの悪い欲望によってイエスを葬り去ろうとしただけなのに、神は何と永遠の昔から、そのようにして贖いをなすことをご自身の隠されたみこころとしておられたと言う！これはとても私たちの頭に理解できるようなことではありません。誰の頭も追い付いて行けない神の卓越した知恵であり不思議です！ですから私たちは自分の小さな頭で勝手にこれもみこころではないかなどと口走り、神の領域に踏み込むようなことをしてはならないのです。隠されていることは主に属することです。それを探ることにエネルギーを注ぐのではなく、私たちとしては現わされていること、聖書に示されている御心に従うことに心と体を用いていくべきなのです。

以上のことを踏まえると、この第3の祈りは具体的にどういう祈りになるのでしょうか。それはまず現わされているみこころ、すなわち聖書の御言葉を良く学び、益々これに従う者となるように！ということです。私たちはただ「みこころがなるように」と祈り、後は神のお考えの通りなるようになれ！と言った無責任な態度を取るべきではありません。神は聖書に多くのみこころを示しておられますから、御心になることを心から祈る私たちは、みこころが書かれている聖書をいよいよ深く学び、まず自分がこれに従う者となることを目指さなくてはなりません。私たちは時々、聖書にはっきり書いてあることと自分のしたいことが違くと、聖書に示されている御心が自分を邪魔するもののように考えがちですが、私たちが持つべき確信は、神のみこころこそ最善であるということです。ですからたとえ私の願いと違って、全知全能の神しかも私たちの天の父が測り知れない知恵によって、これが最も良い道だと示してくださっているのですから、そちらを選び取ることができるように、祈りを通してそのための力を求めて行くことが大事なことではないでしょうか。

そして私たちはもう一つの隠されている御心があることも覚えて、すなわち神の摂理に信頼して、恭しくそれに従うべきです。神は私たち一人一人の人生に計画を持っています。その詳細は前もって示されていないという意味で、私たちにとっては隠されているみこころです。私たちとしては現わされた御心、聖書に従いつつも、なぜこんなことが？と思われるような状況に立ち至らせられます。色々な苦しみ、困難、病気、あるいは突然の愛する者との死別なども起こります。しかし私たちが思い起こすべきは、神はすべてのことにみこころを持っておられるということ。今の私にそれは見えなくても隠されているみこころ、神がその内に秘めておられる最善のご計画がある。ご自身の御子さきも与えて私を救って下さった天の父が、どうして意味もなく私を苦しい状況に放っておかれるはずがあるだろうか。必ず最後の栄光につながる奇しいみこころを持って私を導いて下さっているはずだ！そのように信頼する。あのヨセフも、あの苦しみを通して最善へと導かれた。イエス様が十字架にかかった時も弟子たちは絶望のどん底に落ちました。ところが神はその最悪と思われることから最高のものを取り出してくださいました。ですから私たちはどんな状況にあっても、つぶやくことなく、「あなたのみこころをなして下さい。そのあなたのみこころに私は従います。」と祈り、従って行くのです。

もちろんすぐにそう思えない時、私たちはゲッセマネの園におけるイエス様のように「できることならこの杯をわたしから取りのけて下さい」と祈って良いのです。イエス様がそう祈られたことは私たちにとっての慰めです。しかしイエス様はその後に「わたしが飲まなければこの杯が過ぎ去らないのであれば、あなたのみこころがなりますように」とマタイの福音書 26 章 42 節で祈られました。この言葉は原文でも今日の主の祈りと全く同じ言葉です。そうして御心の道をイエス様は進み、祝福をもたらす王となってくださいました。このイエス様のお姿こそ私たちにとっての永遠の模範です。

最後にこの祈りには「天におけると同様、地においても」という言葉がついています。ここで私たちは天に改めて目を上げるように導かれます。天では御心が完全に行われています。天が天であるのはまさに御心が完全に行われているからです。天が至福の場所であるのは、神の御心のみが完全に行われているからです。私たちはその天を見上げつつ、そのように地でも神の御心こそが行われますように、そうして御国が現れ、御名が聖とされることを切に祈るのです。

私たちは今日の祈りを心から祈る者でしょうか。かつての私たちは神のみこころを何か自分の願いを邪魔するもの、その前に立ちはだかる障害物のように思っていました。あるいは今でもまだそう思うところが残っているかもしれません。しかし素晴らしい事実は、神がみこころを持っていてくださるということです。神のみこころなどない方が良いでしょう。いや、神が私たち一人一人にみこころを持っていてくださるからこそ、私たちには大いに望みがあり、また慰めがあります。神のみこころは私たちに犠牲を強い、私たちを踏み台とするものではなく、私たちに一人子まで送り、私たちを救ってくださろうとする方の途方もなく大きな愛のみこころです。私たちはその御心を持っていてくださる神を見上げて信頼し、一層現わされたみこころ・聖書を熱心に学び、これに従う者となることを祈り求めたいと思います。また私たちの願う通りでない状況や患難があっても、つぶやくのではなく、神の隠されているみこころに信頼し、委ねて、「あなたのみこころが行なわれますように」と祈りたい。そうして神が良しとされる道を喜びと賛美を持って進む天の父の子どもたちの祈りの生活と、そこから導かれる歩みを御前にささげて行きたいと思います。